風呂敷について

奥　平　志づ江
原　　ますみ

1. はじめに

日常何気なく使われている風呂敷は，実に重宝なものである。一枚の四角い布に過ぎないが，包み方，結び方，中味にしたがってその姿を変えるばかりか，包んだ人の人柄まで伺い知れる。その理由は薄い真四角の平面的な単純構造にある。中が空でも一定の形を保っている鞄に比べると，風呂敷は図柄の美しさと豊かな表情を持っており，軽くてたためば小さくなり，収納にも便利である。そこで，風呂敷が何時頃，どのように使われたかを，主として江戸時代について，その語源も併せて調べてみることにした。

2. 時代と風呂敷

(1) 奈良時代

領布（ヒレ）（女性の衿から肩にかけて裙帯（クタイ）と共に正装の時に飾りとした布）などをつなぎ合わせて，舞楽装束を包んだものが正倉院に残されている。

(2) 平安時代

大阪四天王寺宝物の「扇面古写経下絵」（図１）を見ると，衣類を風呂敷に包んで頭にのせ運搬している女性が描かれている。この包みを当時平裹（ひらつつみ），包袱（ほうふく），衣包みといった。

（図１）「扇面古写経」にみる風呂敷

(3) 室町時代

足利義満が建立した大湯殿に，大名衆が一緒に入浴する時，衣類を平包みにして置き，湯上がり後その包みを開いて，その上に座して衣服を着用したといわれる。

(4) 安土桃山時代

西本願寺の境内にある飛雲閣は，秀吉が建てた聚楽第から移したものといわれ，軽快で茶趣味豊かな別荘建築で，その一隅には浴室がある。この浴室は今で言う蒸風呂（サウナ）で，高貴な方が入る時，身体が風呂の底に直接触れることを避けるため，床に四角い布をひ

いて入浴したことから，風呂で敷く布を「風呂敷」というようになった。

(5) 江戸時代

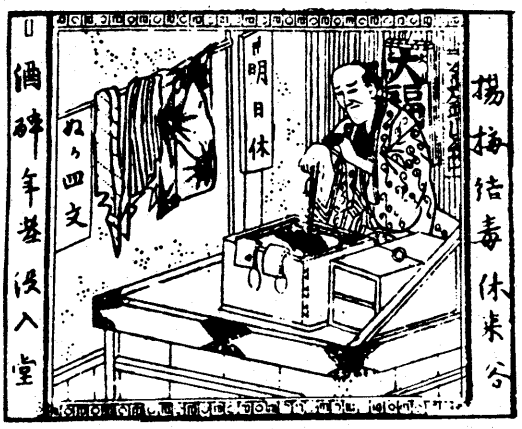
天正19年（A. D. 1596）伊勢与市が建てた銭湯風呂には，一般庶民も入浴するようになり，通貨永楽銭一文で入湯できたので，銭湯と言うようになった。井原西鶴の「好色一代女」の一部の「風呂女」「垢かき女」「湯女」の詞から現在のトルコ嬢を連想し興味深い。この風呂女が大声で「入りに来る人の名を，口ばやに御ざんせんとゆふ。べべのぬれ気色，座をとって，風呂敷のうえになをれば……」と書かれている。「暗女は昼の化物」の項には，「其女，木綿浅黄のひとえなる脇ふさぎを着て，手づから風呂敷包み抱へしが……」と書かれ，遊女が衣包みとして風呂敷を使っていたことがわかる。

伊東貞丈の「貞丈雑記，調度の部」によると「ふろしきとは，風ろに入る時湯殿に敷きて湯よりあがりたる時，足をのごふ物也。物を包む布を縫ひつづける形，かの風呂敷に似たる故，風呂敷といひならはしたる也，近世の詞也」と記されている。宝永年間（A. D. 1704年）の蒸風呂では，男は湯褌（ふんどし），女は湯文字をして入り，湯具を包んだり，床に敷いて湯あがりの身仕度をし，入浴後濡れ物を持ち帰るのに，風呂敷を用いたことがわかる。式亭三馬の浮世風呂の挿絵に出てくる番台風景（図2）で，番台脇に掛けてあるものは，風呂敷や手拭であろう。貞享末年（A. D. 1687年）に刊行された「女用訓蒙図彙（きんもうずい）の湯殿具（図3）には蜘蛛絞りの浴衣や，剣花菱家紋染抜きの風呂敷が見られる。これは他人の物と区別するために，家紋や屋号を染め抜いたものである。

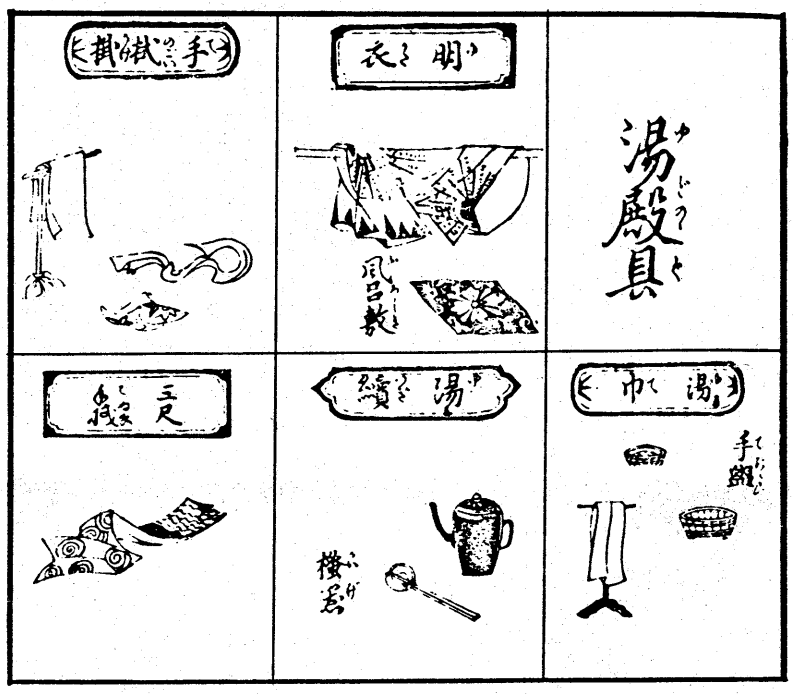
元和2年（A. D. 1616年）徳川家康が病死し，遺品を御三家に形見分けをした時の尾張家の記録「駿府御分家御道具帳」には，「小倉木綿風呂敷　壱」と載っている。この頃には，風呂敷の材質も麻から綿に変り，色や模様も派手になってきた。

3. 風呂敷姿あれこれ

江戸中期には，大小さまざまな風呂敷を背負って歩く呉服屋，小間物屋，十露盤直し，白粉売り，はみがき売り，暦売り，貸本屋などの行商人（図4）が多く見られる。元禄3年（A. D. 1690年）出版の「人倫訓蒙図彙」「切や」（図5）に描かれている四角い文様帛も風呂敷である。旅人にとって風呂敷が必需品であったことは，



（図2） 浮世風呂

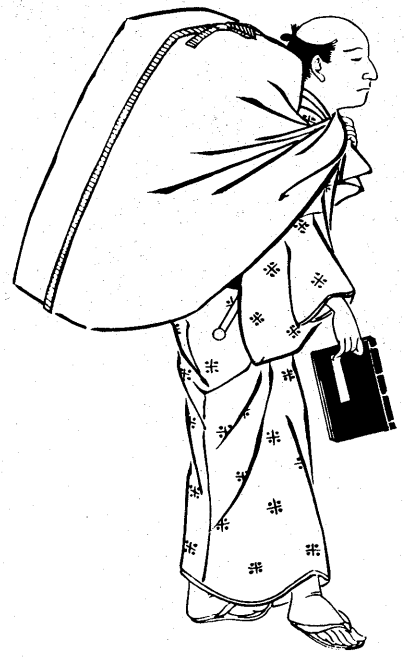


（図3） 湯　殿　具

浮世絵や風俗絵を見て知ることができる。（図6－1）（図6－2）

また江戸期には，火災に備えて夜具などを大風呂敷に包み（図7），寝る時には風呂敷を広げ，その上に夜具をひいていたよ

（図4） 貸　本　屋



（図5） 切　や

うである。風呂敷の大きさにも五巾物から三巾物まで種々あった。
（一巾とは並巾36㎝位である。）

4. 商標風呂敷

上方商人・大丸百貨店の租である下村彦右衛門が江戸に店を開くには，先ず宣伝からと思いたち，「大丸」の商標を中央に染め抜いた朋木色の大きな風呂敷を大量に用意し，この風呂敷に呉服などを入れて，東海道

（図６－１） 東海道中膝栗毛　風呂敷を背負った旅人たち

（図６－２） 岐岨街道　鴻巣吹上富士遠望

（図7） 火 事 場 の 風 景

を上下した。これが，街道すじの人々や，旅人の目にとまり，宣伝効果が上がり，江戸でも商売が繁昌した。それ以後，家紋，社名などを染め抜いたものが，贈答用として用いられている。

5. 帛紗（ふくさ）

帛紗は風呂敷の一種で，主に小物を包み，覆うことに用いられ，古くは「服茶」の字をあてた。茶の湯に用いる帛茶は，絹布を二枚仕立てにしたもので，以前は「紱紗」「服紗」と書いたが，現在は帛紗と書き次の種類に分類されている。

(1) 掛帛紗（重掛ともいう）

大　巾60㎝，丈70㎝

中　巾38㎝，丈42㎝

小　巾33㎝，丈35㎝

(2) 目録帛紗（金子などの進物にかける）

巾18㎝，丈20㎝

(3) 包み帛紗

大巾物，中巾物，小巾物がある。

(4) 茶帛紗

大帛紗は30㎝正方

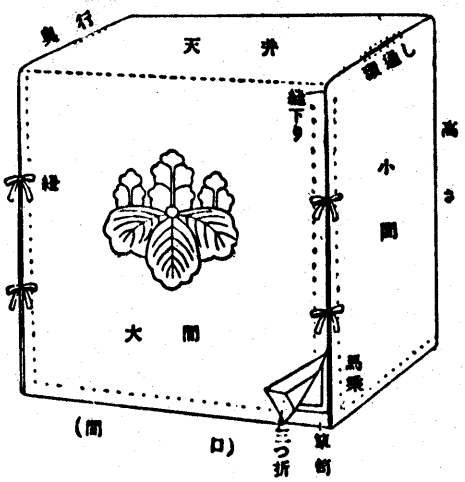
小帛紗は26㎝正方

この外に出し帛紗があり，流儀により大きさも異なる。掛帛紗には定紋，鶴亀，松竹梅等の模様を染めたものや，刺しゅうをほどこした帛紗が祝儀用として用いられる。不祝儀としては，紫，紺色など地味な色の無地物が使われている。

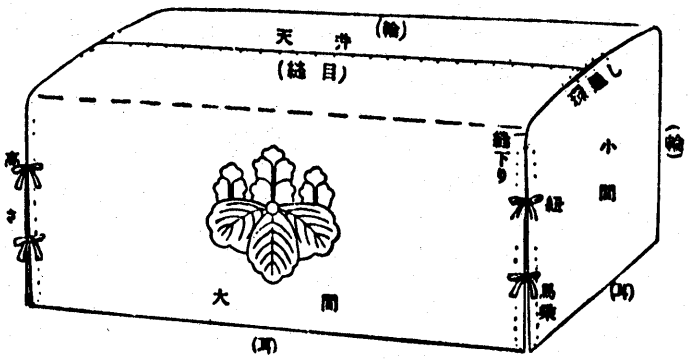
6. 油　単

祝風呂敷として，嫁入りする時，箪笥や長持ちなどに掛ける大きな布を油単（図８－１)(図８－２）と言い，現在でもこれを用いている家庭がある。

油単は主に厚手の木綿地で作られ，藍染めが一般的である。油単の図柄には，定紋入りのものや，ギリシャから伝わった写実的な忍冬唐草模様や，インド，中国から伝わった抽象的唐草模様などがある。（図９）



（図８－１）　箪笥油単

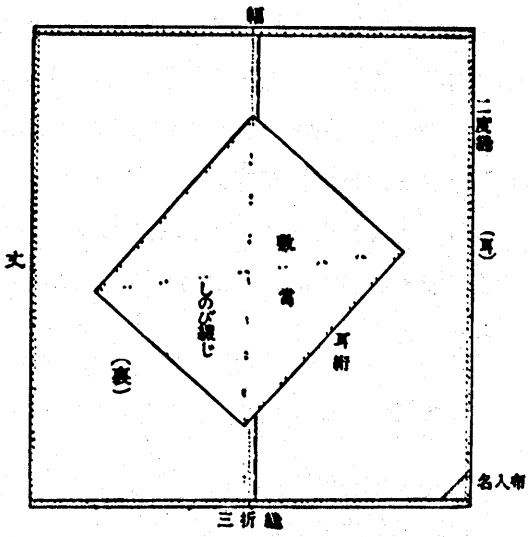


（図８－２）　長持油単

（図９）　唐草紋入風呂敷

7. 風呂敷の仕立方

風呂敷は普通一枚の布であるが，昔は重い荷物を包み持ったので，刺子風呂敷とか，中央に当布をつけた風呂敷（図10）や，結び目を強くするため，四つ角の裏に，布を当てて仕立てたものが多かった。



（図10） 四布風呂敷の仕立方

8. おわりに

風呂敷の便利さと歴史に惹かれて，それにまつわる雑多な風物，記録をあさっているうちに，その主な用途である包装，運搬の機能では，西洋からもたらされた鞄に勝るのではないかという錯覚に捕われ，比較，検討した結果，行き着くところは本質的な文化の差異であり，その機能，用途だけで優劣を判断して未来を予測することの誤りに気付いた。風呂敷は本来うすくて柔らかい真四角の布で，簡単な構造であるため，その大きさ，生地，図柄を利用した使い方によって，その用途も「風呂敷を広げる」表現の如く限りなくひろがるものであるが，鞄は物を入れて運ぶための密閉した固い携帯容器であり，その構造は複雑で，大きさ，形と共に用途も当然限られている。この中間的な機能を備えたものが手提袋である。風呂敷の良さは，物を運ぶ時よりも，小さくたたんでしまえることで，大きさ，形が限定されないフレキシビリティ（柔軟性）である。それ故に不規則，不揃いの固い重量物や，破損し易い物を入れて運ぶには鞄の方が遥かに優れていることは明らかである。言い換えれば，鞄のよさは限られた機能，用途の上での実用性と固さであり，風呂敷のそれは「広げられる」「たためる」「敷く」「覆う」「被る」「結ぶ」「提げる」「肩にかける」等々の機能と，大きさ，生地，図柄を生かした多用性とその柔かさにある。また観点を変えると，物も人と同様，固有の長所，短所があり，裏返せばその逆になることであり，長所だけを伸ばして利用することに活路を見出すことが，物を包み運ぶことだけの用途で，比較することより遥かに有意義であることに気付いた。しかし，風呂敷と鞄の比較から辿りついた重要な結論は，両者がそれぞれの風土，文化と密着適応し，風俗生活様式の中で育って来たもので，その特性はそのまま日本と西洋文化の特質，差異を象徴していることである。主観的な見方ではあるが，風呂敷の柔かさ，美しさ，融通性は日本文化の特徴を，鞄の

固さ，実用性，密閉性は西洋文化の特質を，手提袋の中間性は両文化の混在した現代の生活様式を集約しているような感じがする。そのため，別々の環境条件の中で育って来た両者と生活様式や他の服飾品との組み合わせを取り違えると体裁が悪くなるという問題が残る。実用性が強調される住居や人間活動の場は別として，和服に靴と鞄という取り合わせはチグハグで様にならないからである。この様に考えると，風呂敷の未来はむしろ，実用性より，生活様式，風俗，伝統と密着して，その柔かさと，図柄模様の特異性，優美さを生かし，着物その他の服飾品と調和しながら，同じ道を辿っていくことであろう。

参考文献

服装大百科事典	文化服装出版局
田中千代服飾事典	田中千代
包み	額田　巌
てぬぐい風俗絵巻	川上桂司
きものの染と織	石崎忠司
ミセス全集「きもの通」	浦野理一
江戸商売図絵	三谷一馬
近世風俗誌	喜田川守貞
裁縫精義	奈良女子高等学校
好色一代女（井原西鶴）	岩波文庫